

巻頭言「創価大学とアクティブ・ラーニング」CETLセンター長 関田一彦 ……1
経営学部のグループ演習—アクティブラーニングの実践例……2
【共通科目】ラーニング・アウトカムズに基づく教育改善……3
【GCP】「第12回ノーベル平和賞受賞者世界サミット」にGCP生4名が参加……4
【WLC】iBT Speaking Center, WLC Global Lecture Series ……5
【CETL】教員向けサービス、学生向けサービス、他 ……6
文科省選定事業の紹介とお知らせ……8

創価大学とアクティブ・ラーニング

CETLセンター長・教育学部教授 関田一彦

本年8月28日に出された中教審大学教育部会の答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』には、「学士課程教育の質的転換」に向けた教育方法の改善策として、アクティブ・ラーニング（能動的学修）の導入・推進が謳われている。ただし、アクティブ・ラーニングの考え方自体はそれほど新しいものではない。私自身、20年前にアメリカで書かれた Johnson, Johnson, & Smith (1991) の *Active Learning: Cooperation in the college classroom* を10年前に『学生参加型の大学授業』(2001)として翻訳出版している。日本では「ゆとり教育」の目玉として初等・中等教育に導入された、「総合的な学習の時間」の学習活動として期待されたのも、課題探求・問題解決型のアクティブ・ラーニングであった。初等・中等教育の関係者からすれば、「大学では今頃なんですね」という感じであろう。

さて、答申に先立って6月に出された「大学改革実行プラン」では、大学教育の質的転換に向けて、「学修時間の飛躍的増加と、それを支える学修環境の整備（教員サポート体制、図書館機能の強化等）」および「学生の『主体的な学び』を拡大する教育方法の革新（参加型授業、フィールドワーク等）」が強調されている。そこでは、「教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生が相互に刺激を与えながら知的に成長する課題解決型の能動的学修を中心とした教育へと転換することが必要」とされ、以下の諸方策が提案されている。

- 教育課程の体系化
教育課程全体として、育成する能力、知識、技術、技能と個々の授業科目の関連性を明示
- 組織的な教育の実施
教員全体の主体的な参画により、教員間の連携と協力により教育を実施
- 授業計画（シラバス）の充実
事前の準備や事後の展開などの指針、他の授業科目との関連性等、授業の工程表として機能するよう作成
- 教員の教育力向上、学生の学修環境の整備などを進めるための全学的な教学マネジメントの改善

本学では、教育課程の体系化に関しては、共通科目において2年前からラーニング・アウトカムズの設定とその達成が図られている。経済学部では学問的訓練と就業力育成に配慮したカリキュラム・マップを作成し、学生指導に活かしている。他の学部でもラーニング・アウトカムズの策定やカリキュラム・マップ作りが進行しており、今年度末には全学的な体系化が完了する。

組織的な教育の実施については、各学部は学部独自のFDIに取り組んでおり、そのためのFDI予算が学部支給されている。現在、2014年を目途にカリキュラム改訂と自己点検評価の作業が各学部で進んでおり、その中で教員間

の連携による科目新設やプログラム開発が様々に検討されている。

シラバスの充実に関しても、本学ではすでに全学のFDI課題として2年前から取り組んでいる。その授業に必要とされる授業外学習時間も含め、予習・復習に関する指示や情報の明示を行っている。さらに、電子シラバスでは学生の授業アンケート結果に対する教員からのコメント入力も可能であり、次年度履修を予定している学生に向けた情報発信にも配慮している。

4点目についても、本学は文科省のGP事業に数多く選定されており、全学的な教学マネジメントの水準が高い大学である。たとえば、明年秋に竣工する新総合教育棟2階フロアには、教学担当副学長が学士課程教育機構を通じて先導・整備を進める（仮称）“学び場”（本学のラーニング commons）がオープンする。そこではレポートのコンサルティングなど、多様な学習支援サービスが提供され、学生の学習環境は一段と充実する。

このように、本学では実行プランで示された改善方途の大半を既に試行・実施しており、アクティブ・ラーニングの展開においても相当に進んだ取組を行なっている。授業時に随時、学生同士の話し合いを行わせる協同学習の技法についてはCETLが10年以上、様々な講習会を開催しており、本学の半数近い教員が参加し学んでいる。中でもLTDと呼ばれる技法は、経済・経営学部の基礎ゼミの標準的な指導法として位置づいており、他学部の教員の中にも演習などで活用している方は多い。さらに最近では、経営学部がPBLをグループ演習の共通指導法として採用している。これ以外でもケースメソッドやサービス・ラーニングなど、本格的なアクティブ・ラーニング手法を取り入れた科目も散見される。

こうした現状から考えて、本学のアクティブ・ラーニングはすでに導入期を過ぎ、深化・発展の段階に入っていると思われる。現在、学士課程教育機構が取り組んでいる2つの試みを紹介して本稿を閉じよう。

一つ目は、（仮称）サービス・ラーニングセンターの設立である。現在、ワーキンググループを作って、センターの構想を練っているが、2014年度には地域協働・社会貢献型の学びを支える組織を学内に作り、サービス・ラーニング系科目の拡充を支える。

二つ目は、チームを作って活動するアクティブ・ラーニングにおいて話し合いを生産的にリードするグループ活用スキルを養成する、学生向け課外セミナー（「スタディ・リーダー講座」と呼称）の提供である。質問会議やマインドマップなど、企業研修でも扱われるスキルを磨いた学生が、SAなどスタディ・リーダーとしてアクティブ・ラーニングの諸局面で活躍することで、その活動の質は高まるに違いない。

学部での取り組み紹介

経営学部のグループ演習—アクティブラーニングの実践例

経営学部 学部長補佐 栗山 直樹

経営学部の教育方針

■経営学部のカリキュラム編成方針の大きな柱に、「課題発見力と問題解決力」を養成するため、演習を充実させることが明示されています。1年次から4年次まで継続的に演習が設置されています。経営学は「組織の運営と管理に関する総合科学」と言われています。日々の組織の運営にあたっては、種々の学問分野の知識を使って、現実的な課題を発見し、現実に問題解決をはかっていく実践的な智慧を育む必要があります。

その意味で、経営学部の演習にこそ、アクティブラーニングが必要であると言えます。すなわち、学習した知識を定着させ、そしてその知識を活用するレベルまでつなげてゆく場としての演習です。経営学部では1年生の基礎演習につなげて、専門演習が始まるまでの懸け橋となる「グループ演習」という授業を設けています。時期としては、1年次後期か2年次前期に履修します。



グループ討論

必修科目や他の共通科目や専門科目を学習しながら、この「グループ演習」を通して、知識の定着と応用へのきっかけを得ることが期待されます。

グループ演習では、プレゼンテーションを作成するというプロジェクトを進めることから、PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）のアプローチを活用しています。

グループ演習の3つの仕掛け 学習記録の「見える化」

■アクティブラーニングを効果的に進めるために、3つの仕掛けを設けました。第一は、「演習ポートフォリオ」と呼んでいる学習記録を毎回とることです。これは本学のCETL（教育・学習活動支援センター）のアドバイスを仰いで導入したものです。グループ演習の学びのプロセスで生み出される「学習成果」をファイリングしてゆき（ポケットファイルに入れてゆきます）、学習の成果を確実に積み上げ、それを振り返られるように「見える化」しようとするものです。

例えば最初の授業では、ゼロから1を創造する活動として、まず課題の発見から始まります。8分間のプレゼンテーションの創造を目指して、原則4人で構成されるグループごとにテーマを見つけてゆきます。あらかじめ配布している履修者ワークシート（履修ガイドと7種のワークシートの綴り）のうち、「学び始めシート」「プロジェクト企画書」「研究分担表」をグループのメンバーと議論し

ながら記入してゆき、プロジェクトの作成に着手します。次の授業までの課題として、毎回の個人の課題の研究結果は「個人研究報告書」に、また、その日に学んだ事項は「対話ジャーナル」に記入しなければなりません。学びのプロセスが全て記録されてゆきます。

そして、次の授業で他のメンバーからフィードバックを受けます。記入された各シートは教員に提出され、毎回チェックを受け返却されます。それが成績評価の累積点数となり、成績までもが「見える化」されています。また、統一フォーマットである履修者ワークシートとともに、担当教員には教員用ワークシート（運営マニュアル）を配り、授業の進め方から評価基準に至るまでゼミ間で差異が生じないような標準化が企図されています。

ゼミ内でプレゼンテーションを相互評価しながら改善し、ゼミの代表チームを選出します。評価にあたっては5つの評価基準（情報収集力、論理性、着眼点、プレゼン力、質問対応力）から行い、評価する側としての眼力も養うこととなります。

勝ち抜き戦とSAの活用

■第二の仕掛けは、予選、本選の勝ち抜き戦でムードを盛り上げてゆくことです。ゼミの代表チームは3つのブロックでプレゼンテーションの予選を競い、そしてその中から各ブロックの代表2チームが勝ち抜き、本選を争うこととなります。代表に選ばれなかったメンバーは、今度は評価する側に回り、所属するゼミやブロックと違うグループのプレゼンテーションに対して評価シートを参考に客観的な評価点をつけます。この

の間、本選へのエキサイティングな雰囲気が高まり、受講学生は最後までプレゼンテーションを真剣に聞き学んでいます。

第三の仕掛けは、先輩の活用です。それぞれのゼミには、先輩のSAがつき、毎回アドバイスやサポートに回ります。また、評価シートの採点の集計など教員のサポートにも当たります。さらに、SAは単なる教員のサポート役ではなく、先輩として直接履修者にアドバイスをする存在として、彼ら自身も学んでいます。

振り返り

■履修学生は最後のゼミで、それまでにファイルされた学習記録を見ながら「振り返りシート」を記入します。「仲間と協力しながら無から有を創りだす大変さを実感した」などのコメントが多く見られます。授業外学習時間の多さも授業アンケートから窺えます。そして何より多くの学生が、「経営やビジネスについての大きな関心が湧いた」との声をあげています。

これらの学びの軌跡を振り返ることにより、これからの学部での学びの意欲の向上につながってゆくことが期待されます。経営学部での主体的な学びの促進力として、アクティブラーニングの仕掛けをさらに導入してゆきたいと思えます。



プレゼンテーション風景

共通科目

ラーニング・アウトカムズに基づく教育改善

副機構長 西浦 昭雄

現在、本学では教育面における「内部質保証システム」の確立を目指し、ラーニング・アウトカムズの策定とアセスメント実施を通じた①カリキュラム改善、②授業改善に取り組んでいます。学士課程教育機構は、2011年1月に共通科目ラーニング・アウトカムズ8項目を策定し、本年度より全ての共通科目シラバスにおいて、該当ラーニング・アウトカムズを最大3項目まで明示するという取り組みを開始しました。さらに、専門科目のラーニング・アウトカムズの策定についても学部別で検討し、2011年度自己点検・評価報告書にて掲載されました (http://www.soka.ac.jp/soka/common/pdf/2011_self_report02.pdf)。本号では、共通科目におけるカリキュラムの改善と授業の改善を目指した取り組みについて紹介します。

まず、共通科目のカリキュラム改善の取り組みを紹介します。検討を重ねてきた2014年度からの新カリキュラム改訂について、本年9月に開催された第5回大学教育研究評議会において、大学科目の選択必修1科目2単位増加(計2科目4単位)、日本語文章表現法(1科目2単位)の必修化などが決定されました。さらに将来的なカリキュラム改善に向けて、2012年度シラバスへの該当ラーニング・アウトカムズの入力情報をもとに表1の分

布表を作成しました。この結果、ラーニング・アウトカムズ8項目全てが年間100以上の授業によってカバーされていることが分かりました。来年度は、複数(最大3項目)の該当ラーニング・アウトカムズを記入する際、最重点項目を明記することでより正確に分布状況を把握していきます。

次に授業の改善については、2011年度には共通科目ラーニング・アウトカムズを実際の授業で活用することを目指し、パイロット・アセスメントを26授業で実施しました。その詳細は、本年5月に新しく発刊した学士課程教育機構研究誌 *The Journal of Learner-Centered Higher Education* に掲載されています。さらに2012年度には、11の科目群から各セメスター1~2授業をパイロット授業として選定し、シラバスで掲げた「到達目標」の到達度測定を実施しています。表2のように前後期あわせて約30の授業が選定され、すでに前期14授業の報告書が提出されています。今後は、シラバスで提示する「到達目標」の想定レベルに教員間の認識の違いがみられることから、2012年度後期には共通科目・専門科目別に現状把握とレベル設定に関する意見集約をする予定です。

表1 2012年度共通科目におけるラーニング・アウトカムズ分布表

ラーニング・アウトカムズ項目	前期	後期	合計
1. 人文・社会・自然科学、健康科学領域の基礎知識を理解する。	124	110	234
2. 多面的かつ論理的に思考する。	134	146	280
3. 問題解決に必要な知識・情報を適切な手段を用いて入手し、活用する。	121	145	266
4. 日本語による多様な表現方法を習得し、明瞭に論じ述べる。	62	71	133
5. 英語と母語以外の他外国語でコミュニケーションを図る。	285	267	552
6. 学びの意味や社会的責務を考え、自らの目標を設定し、自立(律)的に学ぶ。	127	139	266
7. 自他の文化・伝統を理解し、その差異を尊重する。	169	162	331
8. 人類の幸福と平和を考え、自己の判断基準をもつ。	53	55	108
計	1,075	1,095	2,170

(注)シラバス数は、2012年度前期は522、同後期は516であった。

表2 2012年度 共通科目ラーニング・アウトカムズ測定科目

科目群名	前期	後期
①大学	創価教育学講義/共通基礎演習	人間教育と人間理解/共通基礎演習
②キャリア教育	ワールドビジネスフォーラム	企業研究
③言語	フランス語Ⅰ・Ⅱ/English Communication Elementary	スペイン語Ⅲ・Ⅳ/EAP Intermediate
④健康・体育	バトミントン	スポーツ心理学b
⑤人文・芸術・思想	現代史入門/文章表現法b	文章表現法a
⑥社会・文化・生活	社会学Ⅱ	国際関係/政治学入門
⑦自然・数理・情報	多様な植物のもつ有用性	コンピュータ・リテラシー(e-learning)
⑧平和・人権・世界	中国研究/共通総合演習	韓国研究/共通総合演習
⑨Japan Studies Programs	JSP Economics	JSP Law
⑩GCP	チュートリアルAⅠ/BⅠ	社会システムソリューションⅠ/Academic Foundation
⑪日本語・日本文化	初級漢字/日本語聴解Ⅳ	日本語口頭表現Ⅱ/日本語文章表現Ⅲ

「第12回ノーベル平和賞受賞者世界サミット」に GCP生4名が参加

学士課程教育機構 准教授 佐々木 諭

歴代のノーベル平和賞受賞者が一堂に会し、平和や人権をはじめとする地球的問題群を議論する会議—「ノーベル平和賞受賞者サミット」—にGCP生4名が世界青年代表団として参加しました。

4月23日に米国シカゴ市で開催された「第12回ノーベル平和賞受賞者世界サミット」は、「Speak Up, Speak Out for Freedom & Rights」をテーマに、3日間にわたり「平和への挑戦」、「一人の人間が世界を変える」、「核兵器の無い世界」等と題するセッションが開かれました。今回のサミットには、ゴルバチョフ元ソ連大統領、ワレサ元ポーランド大統領、デ・クラーク元南アフリカ大統領、カーター元米国大統領、モハムド・ユヌス・グラミン銀行創設者ら7人のノーベル平和賞受賞者と核戦争防止国際医師会議、パグウォッシュ会議らのノーベル平和賞受賞団体からの代表らがパネリストとして参加し、平和、核兵器廃絶、人権に関して議論を繰り広げました。



世界サミットのセッションの様子
(左よりワレサ元大統領、デ・クラーク元大統領、
ゴルバチョフ元大統領、カーター元大統領)

サミット初日の開会式は、エマニュエル・シカゴ市長の歓迎挨拶、オバマ大統領のビデオメッセージで始まり、ノーベル平和賞受賞者を代表し、ジョディ・ウィリアムズ女史とゴルバチョフ元大統領が記念のスピーチを行いました。ウィリアムズ女史は「平和賞受賞者が特別な存在なのではなく、市民一人一人は誰でも変革への力を持っている」と強調し、続いて、ゴルバチョフ元大統領は、「変化は痛みを伴うが、新しい秩序が求められている。今この時に、私達ノーベル平和賞受賞者が青年たちに自分たちの歴史を伝えていくことは、義務なのである」と青年が世界を変えるために立ち上がってほしいとの期待を寄せられました。

今回の世界サミットへは、日本からは唯一創価大学の学生が世界青年代表団として参加しました。参加の契機は、一昨年11月に広島で開催された第11回世界サミットに参加したGCP生5名が、会議セッションでの積極的な質問や米国学生代表団と学生

共同宣言をとりまとめるなど、世界サミット成功に多大な貢献をしたことが評価されたことにあります。

GCPでは、実践的な英語コミュニケーション力を磨くことを目指していますが、今回の世界サミットにおいても、GCPで修得した力を存分に発揮し、世界サミットに貢献していました。ユヌス博士、ステルツァー国連事務総長補佐官らが参加した「平和を創るための投資」と題するセッションでは、経済学部3年の中村信之君が提示した「資本主義が継続しゆく可能性に関する質問」が紹介され、パネリストが今後の世界経済を展望しながら答えていました。また、デ・クラーク元大統領、ユヌス博士、ガーナ独立の父といわれるエンクルマ初代大統領の令嬢で現在国会議員をされているサミア・エンクルマ女史と直接話をする機会もあり、忘れ得ぬ出会いの一コマとなりました。

今回の世界サミットの参加は、GCP生4名にとり、創価大学の代表としての責任と使命感を持ち、友好を広げ、信頼を深めることに取り組むことにより、地球市民としての力と人格を更に磨く貴重な機会となりました。また、GCP生は、ノーベル平和賞受賞者の語られた平和を求める言葉の一つ一つは、創価大学の理念である慈悲と智慧と勇気による平和の創出と同じものであると感銘していました。参加したGCP生の一人は、「平和建設のためには、異なる価値観を持つ人との『対話』と『青年の力』が必要であり、青年を育てていくためには『教育』を重視しなくてはならないと繰り返し強調されていました。これからも平和を創りゆくグローバルリーダーとなるために、一層勉学に励んでまいります」と決意を語っていました。

現在、GCP生は、GCPで磨いたコミュニケーション力や教養、人格を活かし、より高い力を修得するために、積極的に学外の行事にも挑戦しています。10月9日より東京で開催されたIMF・世界銀行年次総会にも3名のGCP生がボランティアに選考され、総会の成功に尽力しました。今後のGCP生の世界を舞台にした活躍に一層期待が高まっています。



世界青年代表団としてサミットに参加したGCP生

iBT Speaking Center

WLC講師
アレックス・チャーンサイド

歴史的にみて、長い間日本人の大学生はTOEFL iBTのスピーキングセクションで苦戦しています。聞いてみると、たいいての学生はやはりこのセクションに一番自信がないといひます。TOEFL iBTのスピーキングセクションを教える場合、課題となるのは、大人数の授業で授業計画も詰まっている状態で、一人一人に的確なフィードバックを与えるのが難しいことです。この問題に対応するため、ワールドランゲージセンターでは2012年前期にiBTスピーキングセンターを開設しました。このスピーキングセンターでは、iBTのスピーキング問題を練習し、担当の助教から1対1で弱点などを克服するためのフィードバックをもらうことができます。

スピーキングセンターは、本部棟7階ワールドランゲージセンターラウンジ内の2部屋に位置し、平日17:00から19:00にオープンしています。1回のセッションは30分で、各セッションは20分間のスピーキング練習と10分間のコメントを書く時間に充てられます。1週間で24回のセッション

を提供しています。

センターはゴールデンウィーク明けの5月7日(月)に開設し、前期が終了する2週間前の7月13日(金)まで計10週間運営されました。この間、226名の学生がスピーキングセンターを利用しました。

学期末、スピーキングセンターの利用を課しているクラスの学生にアンケート調査を実施しました。アンケートはスピーキングセンターを5段階で評価するものです(1=おおいに役に立った(extremely useful)、2=かなり役に立った(very useful)、3=役に立った(useful)、4=あまり役に立たなかった(not very useful)、5=全く役に立たなかった(not at all useful))。回答数75のうち、半分以上がおおいにまたはかなり役に立ったと評価し、さらに3分の1の学生が役に立ったと評価しています。

スピーキングセンターは、後期、10月3日(月)からオープンしています。

WLC Global Lecture Series

WLC准教授
ローレンス・マクドナルド

2012年前期、ワールドランゲージセンターは新しい試みとして、Global Lecture Series (GLS)を開催しました。GLSは、NPOやNGO、ビジネスや学術機関などで国際的に活躍するリーダーをお招きし、直接お話を伺う機会を学生に提供することを目的としています。プロとしてさまざまな舞台上で活躍する日本人の講演者に、その仕事内容や自身の人生経験などを語ってもらいます。このような機会を通し、学生にとって、職業選択の幅を広げ、いかに英語の力を身につけることが重要であるかを実感する場になればと考えています。

2012年5月、第1回GLS講演者として、特定非営利活動法人AMDA (the Association of Medical Doctors of Asia) 社会開発機構の鈴木俊介理事長をお迎えしました。AMDA社会開発機構は、小規模融資や所得創出、教育や保健衛生などの分野でのインフラ整備を通し、社会開発事業の向上を目指しています。鈴木理事長は冒頭、コロンビア大学で修士号を取得し、開発の仕事に従事し始めたいきさつを説明。小規模のベンチャー企業に携わる女性への融資など、AMDA社会開発機構が行っている活動をビデオや写真で紹介して下さいました。また、2006年にノーベル平和賞を受賞したバングラデシュのグラミン銀行創設者であるモハマド・ユヌス氏を鈴木理事長がインタビューしたNHK番組のビデオも上映されました。学生からは大きな反響が寄せられ、鈴木理事長がご自身の開発へのアプローチは連携や協調の1つの形にすぎないこと、AMDA社会開発機構で開発途上国の市民を手助けすることはできても、地域の人々と密接に関わり、背景や文化を理解することが不

可欠であることを特に強調されていたところに感銘を受けたという声が寄せられました。

6月には、第2回GLS講演者として、アメリカ創価大学副学長である高橋朋子博士をお迎えしました。「夢に向かって生きる力」と題して、高橋副学長は、1970年代に若い学部生としてアメリカ合衆国へ旅立したこと、1984年にコロンビア大学で博士課程を修了したことなど、自身の感動的な体験をお話下さいました。また、ローザ・パークス女史との交流を紹介し、女史の著書を翻訳したことや創価大学創立者である池田大作先生と女史の対談に同伴したエピソードなども披露して頂きました。ある学生は「高橋先生の講演で、夢に向かって進み続けようと励まされました」と感想を寄せていました。高橋副学長の体験に感動しただけではなく、努力と忍耐で夢を叶えることができるというメッセージを学生が実感すること

ができた講演となりました。

アメリカ創価大学副学長
高橋朋子博士

■2012年度学士課程教育機構FDセミナー(前期)

2012年度前期に、全4回のFDセミナーを開催しました。ニュースレターでは、その中の2つを報告します(2つのセミナーは学内のパソコンからCETLのホームページにて視聴できます)。

○第1回FDセミナー 講師：大塚雄作教授(京都大学)

4月27日(金)、京都大学高等教育研究開発推進センター長の
大塚雄作教授をお招きし、FDセミナーを開催しました(テーマ：
「大学評価とFDの課題—学生の学びの実質化に向けて—」)。

「毎回授業アンケート」の挑戦やグループ討論の導入など、大塚先生御自身が実際に取り組まれた授業運営の工夫や取り組みに対する効果や課題についての経験をふまえて、授業改善および評価の在り方について御講演頂きました。

当日は、44名の教職員が参加し、アンケートでは、参加者全員が有益な内容であったと回答しました。「抽象的なことや理想像の話ではなく、大塚先生のありのままの授業への取り組みや評価の変遷を紹介頂き、安心する部分と自身の課題とを感じた」、「今



までの講演の中で、一番感動的だった」など、非常に有益なセミナーであった旨の感想が数多く寄せられました。

○第2回FDセミナー 講師：中川正明理事(京都産業大学)

5月11日(金)、京都産業大学理事の中川正明理事を講師にお迎



えし、「京都産業大学におけるキャリア形成支援教育(日本型コーオプ教育)の展開から就職支援へ」のテーマで第2回FDセミナーを開催致しました。

京都産業大学におけるキャリア教育の実践例を通し、独自のインターンシップ制度や教育スタイル(日本型コーオプ教育)の必要性・特色や課題等について、講演して頂きました。

30名を超える参加者からは、「コーオプ教育のリーディング校における具体的事例の講演は、今後の大学教育の在り方について大きな参考になった」「就業力と大学教育とを有機的に結びつける新しいタイプのキャリア教育を追求し、実現されている姿に、深い感銘と刺激を受けた」等の声が多く寄せられました。

■教育サロン・ブラウンバッグ

5月23日~7月18日の毎週水・木曜日(12:25-13:00)に、全国私立大学FD連携フォーラムが作成した「実践的FDプログラム」のオンデマンド講義の視聴会「教育サロン・ブラウンバッグ(講義を視聴し、気軽に感想を述べあうランチミーティング)」を開催しました(全18回)。今回は、沖裕貴先生(立命館大学)の講義「大学の授業の設計」などを視聴し、毎回、6~8名の教職員が参加しました。毎回参加して下さった山田竜作先生(SEED)からは、「授業改善という問題意識はあっても、ひとりで考えているだけではよい智慧も浮かばないものです。同僚の皆さんがどのように

ご苦労され、どんな工夫をなさっているか、カジュアルな雰囲気でお話し合える場合は、新任教員として非常に貴重なものでした。また、オンデマンド講義内での『授業が教員のワンマンショーであってはならない』との指摘は、何より胸に刺さりました。可能であれば、近い専門領域の講義をご担当の先生方とも、こうした場で意見交換できればさらに有難いと思います」と感想をいただきました。

後期は、12月の水曜日(12月5日・12日・19日)と木曜日(12月6日・13日・20日)を予定しております。ぜひ、ご参加下さい。

■アドバイザー教員支援 オアシス・プログラム

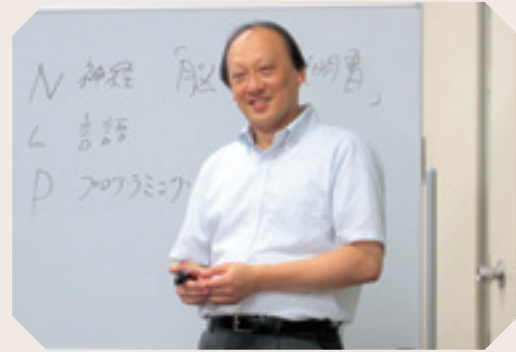
オアシス・プログラムは、CETLが学部のアカデミック・アドバイザーと共同で、成績不振による面談指導が必要な学生を対象に行う個別学習指導です。学部アドバイザーからの推薦状と学生本人が書いたエントリーシートをもとに、CETL特別センター員が学生一人ひとりの状況に合わせて、学習スキルの個別指導やコ

ー칭ング・セッションによる学習意欲の向上を図ります。これまで、予定通りにプログラムを修了した学生の多くは成績を回復し、卒業に向けて頑張っています。気になる学生がおられましたら、ぜひCETLにつなげて下さい。

■学習セミナー

2012年度前期、CETLでは、自己管理能力アップ講座、文章力アップ講座、あるいはマインドマップ講座など、6つのジャンル(講座) 32タイトルのセミナーが用意されました。合計68回のセミナーに184名の学生が参加しました。

「毎回セミナーに参加するたび、自分自身の発見があり、向上心と希望が生まれます」(自己管理能力アップセミナー講座の「本当の自分を知る」セミナー参加者)。「他の人の要約が聞けて学びが深まりました。いい文章とは万人がわかるものだと思います」(マインドマップによる「要約の仕方」参加者)など、多くの参加者から高い評価を受けました。



NLP認定トレーナーの杉本薫先生

前期学習セミナー	実施数	参加者数
自己管理能力アップ講座	23	63
対人関係力アップ講座	12	46
文章力アップ講座	24	62
文章読解力アップ講座	5	9
図書館活用力アップ講座	4	4
合計	68	184

また、CETLの数学担当の先生が数学の苦手な学生と一対一で個別指導を行う「数学チューター」も行っており、1回30分、

のべ102名の学生が利用しました。

他にも、レポート診断サービスや学習に関する相談など、さまざまな支援を行い、多くの学生が利用しました。

後期には、放課後に参加できない学生に配慮したお昼の短時間セミナーを設け、学習セミナーを拡充し、33タイトル計132回のセミナーを実施します。

また、後期から新たに「レポートチューター」を開始します。レポートに関する相談や悩みをプロフェッショナルと一対一で解決することを目指します(1回30分。完全予約制:A206にて受け付けます)。

■学生FDの本学での取り組みと全国的流れ CETL助教 齊藤幸一

FD (Faculty Development) の中でも教職員だけでなく、学生も参画する授業改善を含めた大学教育力向上のための組織的な取り組みを、「学生FD」と呼びます。例えば、教職員と学生による大学教育改革についての話し合いや、学生発案型授業の提案などの取り組みです。

本学では、開学当初(1971年)に創立者から「学内の運営に関しても、学生参加の原則を実現し、理想的な学園共同体にしていきたい」という指針が示されました。そこから、学生主体の大学建設という伝統ができ、今も続いています。例えば、理事会・学長・各学部長・各事務長と学生代表による「全学協議会」(通算320回、2012年5月現在)が、本学の特徴の一つです。また、新学期履修登録やゼミ登録などの学業の節目に、上級生が自主的に後輩の相談に乗るという学習支援をしてきました。CETLでは、そのような学生同士による学習支援の質を高めるため、コミュニケーションスキルや文章力を磨くリーダー研修をしています。

学生による授業改善の取り組みに加え、このような学習支援活動が、2010年頃から「学生FD」と呼称され、全国的に定着し始めています。そして、そ



2012 夏 学生FDサミット

それに携わる教職員・学生の大学間交流が活発に行われるようになりました。本年8月にも、「学生FDサミット」というイベントが立命館大学で開催され、全国から59大学400名が参加しました。本学からも学生3名が参加し、本学の取り組みを紹介しました。

<2012年度CETLセンター員>

- | | | |
|-----------------------|-------------------------|------------------------|
| センター長 関田一彦 教授(教育学部) | センター員 藤本和子 准教授(文学部) | センター員 山崎めぐみ 准教授(SEED) |
| 副センター長 望月雅光 教授(経営学部) | センター員 久保田秀明 教授(教育学部) | センター員 清水強志 准教授(SEED) |
| センター員 碓井健寛 准教授(経済学部) | センター員 足立広美 准教授(教育学部) | センター員 山下由美子 講師(SEED) |
| センター員 近貞美津子 講師(経済学部) | センター員 舟生日出男 准教授(教育学部) | CETLスタッフ 福田伸枝 助教(CETL) |
| センター員 中村みゆき 准教授(経営学部) | センター員 川井秀樹 准教授(工学部) | CETLスタッフ 鈴木夕佳 助教(CETL) |
| センター員 松田佳久 教授(法学部) | センター員 井田旬一 准教授(工学部) | CETLスタッフ 畑由美子 助教(CETL) |
| センター員 須藤悦安 准教授(法学部) | センター員 富岡比呂子 講師(創価教育研究所) | CETLスタッフ 齊藤幸一 助教(CETL) |
| センター員 村上信明 准教授(文学部) | センター員 田村修一 准教授(教職大学院) | |

2012年5月18日(金) 12:25より、本年度の第1回CETLセンター員会を開催しました。

文部科学省「平成24年度グローバル人材育成推進事業」に採択

平成24年度の文部科学省補助金事業「グローバル人材育成推進事業（特色型）」に、本学の申請事業が採択されました。

「グローバル人材育成推進事業」は、「若い世代の『内向き志向』を克服し、国際的な産業競争力の向上や国と国の絆の強化の基盤として、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる人材の育成を図るべく、大学教育のグローバル化を目的とした体制整備を推進する事業に対して重点的に財政支援する」（文部科学省ホームページ）ものです。

これまで、本学は建学の精神に基づき、学生一人ひとりの「知性」と「人間力」の向上を基礎とした「創造的人間」の育成に努めてきました。そして、世界46ヶ国・地域の140大学との交流を通じてグローバルに活躍する人材を輩出してきました。

採択された本事業計画では、10年間に渡る経済学部インターナショナル・プログラム（IP）の経験を活かし、全学部に

おいて外国語による授業を拡大します。また、共通科目の英語化推進や英語学習プログラム（1年生を対象としたEnglish for Study Abroad等）の設置などにより、本学の英語教育の質量ともの充実を図ります。

他方、各学部カリキュラムとリンクした短期海外研修の開発や長期留学のサポート拡充などに積極的に取り組み、海外での修学体験の機会の拡大もはかります。

そして、平成28年度には、年間海外留学経験者1,000名、このうちの480名が外国語スタンダード（TOEFL iBT80点等）を満たしていることを目標に、高度な外国語運用能力を身に付けたグローバル人材の育成を目指します。

なお、本事業を各学部・事務組織と連携して総合的に企画・運営する機関として、「グローバル教育推進センター」を学士課程教育機構内に設置します。

文部科学省「平成24年度大学間連携共同教育推進事業」に採択

この度、本学は、文部科学省の「（平成24年度）大学間連携共同教育推進事業」に選定されました。本事業では、社会の急激な変化に適応できる多様な人材を育成するため、大学間の相互連携によるプログラムを支援することを目的としています。採択された本プログラムは千歳科学技術大学を代表校としており、山梨大学、愛媛大学、佐賀大学、北星学園大学、愛知大学、桜の聖母短期大学の7大学とともに、「学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進」に取り組みます（本学ではCETLが中心になって本事業を実施）。

具体的には、(1)各大学において入学段階での学生の学習特性などを把握・共有し、それに見合った初年次の学修支援プログラムを構築すること、(2)社会の要請に応じた共通の到達度テス

トに基づいて学生の弱点を分析し、弱点箇所を学生自身が主体的に学べる、eラーニングによるキャリア系学修支援プログラムを開発すること、(3)大学間のFD・SDを通じて、各大学の教育方法を共有しながら、質の高い体験型・交流型の教育プログラムを展開し、自律型人材を育成することなどを目指します。そして、教材開発や到達度テストなどの学士力に関わる共通基盤的な教育要素をクラウド上の共通基盤システムで共有します。

また、本プログラムは、日本リメディアル教育学会や日本情報科教育学会とも連携して質の高い学士力の確保に努め、他大学や地域社会で活用できる汎用性の高い学習内容や方法を構築し、ユニバーサル時代を迎える日本の高等教育の質向上を目指します。

Info

本年度「創価大学FDフォーラム」のお知らせ

平成24年12月15日（土）13:00より、創価大学S201教室において、第10回FDフォーラム「グローバル化時代の大学教育」を開催します（FD委員会主催）。

第1部では、桜美林大学大学院の山本眞一先生をお招きして、講演をしていただきます（演題：大学教育の質保証—諸変化への対応のために—）。

第2部では、文科省による補助金事業として採択された「創価大学におけるグローバル人材育成の取り組み」について事例報告を交えて報告します。

学外の方の参加も歓迎です。ぜひ、ご参加下さい。

FDセミナー（ワークショップ）のお知らせ

カナダ（ケベック州）のラバル大学からDr. Serge Talbot氏（General director of Undergraduate Program）を講師としてお迎えし、ワークショップ型のFDセミナー“The Pleasure of Making Learning Happen”を開催します（英語、通訳なし）。

■日時：11月17日（土）10:00～17:00

詳細は<http://cetl.soka.ac.jp/20120928.html> をご覧ください。事前申し込み制となっておりますので、参加ご希望の方はお早めをお願いします。



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第4号
発行日 2012年11月12日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<http://seed.soka.ac.jp/>



NEWS LETTER SEED